令和７年度　神戸市立科学技術高等学校　学校評価報告書

校園長名　河野　彰信　　記入者名　尾久土　真一・住谷　講基

神戸の教育が目指す人間像	教育ビジョン	神戸が目指す　これからの学校の姿
心豊かに　たくましく生きる人間	**自他を大切に 自ら考え 未来をつくる**	**人がつながり ともに創る みんなの学校**

学校づくりの目標	「未来志向型エンジニアの育成」をコンセプトとして、KOBE S・M・A・R・T Engineers育成事業（市立工業高校におけるDX時代に適応した職業人材育成事業）を軸とし、好奇心、探究心、公徳心を持つとともに、豊かな創造性を兼ね備えた人材の育成を目指す

	内容	重点的な取組み	評点（４段階）	特記事項（学校自己評価）	関係者評価（学校自己評価に対する学校運営協議会の意見等）	学校自己評価、関係者評価を踏まえた次年度の重点的な取組みの案
育てたい子供の姿	教育目標：ものをつくる喜び　科学する心　未来を拓く力					
	ものづくり×IT	資格取得やものづくりを通して、基礎的・基本的な技術を身につける	4	DX事業の推進により、ものづくり教育の向上を図れ、生徒に基本技術を身に着けさせることができた。また、マシニングセンター・レーザー加工機・３DCADなどの機器を積極的に活用するなど、実習を通して基礎から発展までの技術指導もできた。全体的に学力の底上げができており、資格取得でも様々な国家技能検定を積極的に取り組めた。	専門教育への満足度は高く、基礎的・基本的な技術の定着は概ね達成されていると評価する。今後は、ICT活用を技能習得にとどめず、課題設定からデータ活用・発信までを含む一貫した学習設計へと発展させることで、社会で活かせる力をもった価値創出型の人材育成につながることを期待する。	・基礎基本の知識技術を確実に定着させる。 ・自ら考える未来に必要な技術を修得させる。 ・ICT活用を拡大し、課題解決学習への学習課程をより充実させる。
	ものづくりの実践的・体験的な学習	専門技術、先端技術を意欲的に学習する態度を養う	4	各科でDX事業の推進に絡めて最先端の技術や知識に触れ学ぶ機会を増やし、ものづくりに関する興味関心を引き出すとともに、未来志向の基盤を作りを行っている。本年度は、K-Smart講演会における最先端ロボットの操作体験、インターンシップ、企業見学や体験型学習を積極的に取り入れなど行った。	実習や体験的活動は生徒満足度の高さにも表れており、貴校の大きな強みである。今後は、学習プロセスや成果を可視化・記録する仕組みを整えることで、教育効果の客観的検証と広報への活用が一層進むと考える。	・実習、実験を充実させるとともに、生徒の技術習得度合をフィードバックさせる。 ・実習、実験の系統、および各種結びつきを洗い出し、3年間を見通した計画を構築する。 ・OBOGや本校との関連が深い企業を積極的に活用していく。
	課題解決能力の育成		3	各科ともに課題研究を中心に、ものづくりで得た課題解決力を生かし試行錯誤を重ね、完成もしくは発表までこぎつけることができた。概ね、ものづくりにおける課題解決はできている。PBL学習法を導入し問題解決能力を育成し、自己の進路実現に大きな力となった実績を作ることはできた。今後の課題として、問題解決能力を様々な場面で発揮できる段階に進めていきたい。	K-SMART Engineersや課題研究等を通して、実社会に近い課題に取り組む機会が確保されており、その取組は評価できる。評点３は妥当であると考える。今後は、ICT活用も含めた探究のプロセスや成果を整理・共有することで、課題解決力の育成がより一層明確になることを期待したい。 未来志向の一端として人口の情報、社会情勢にできる限り接する機会を与える必要があると考える。	・現在、K-SMART1.0の段階が終わろうとしており、これまでの取り組みを土台とし、普通科と各工業科が連携しK-SMART2.0「発展：科の枠を超えた取組の推進」へ進む。 ・未来志向を進めるために社会情勢、人口変動、などグローバルな視点を持つ人材育成のため様々な分野との関連をできるだけ取り上げていく。
	ヒューマンスキルの向上	特色ある授業、学校行事や部活動を通して自己実現を目指す 自主・自律の精神を養う	3	授業で学んだ知識や技術を発揮する部活動を積極的に支援している。また、それ以外の部活動でも科をこえた人間関係の学びの場として重要な機会となっており、各顧問が熱心に指導を繰り返し自主自律の育成を行っている。確認する、鉄道関係企業に10社11名が内定。グループワーク、ディスカッションの機会が増え人間力の向上にもつながっている。さらに自主性を育む教育の取り組んでいく	学校行事や部活動の充実は評価できる。今後は協働学習や振り返り活動を意図的に設計し、コミュニケーション力や自己調整力を可視化・育成する取組を強化することで、より社会実装力の高い人材育成につながると考える。	・生徒の持つ様々な可能性を引き出す仕組みを授業以外に計画していく。さらに、実施した結果を職員、生徒ともに共有し、次への活動に生かす。
全市的に推進すべきこと	①いじめ防止対策に関する取組み	いじめアンケートの実施（年３回）、いじめ問題対策委員会	4	担任や教科担当、顧問など現場責任者が機敏に情報収集を行い、指導部が中心となり各科や学年と協力し合い迅速な対応が取れている。必要に応じて、共通理解も図れている。必要に応じて、教育委員会や法務専門家とも連携し対応を進めることができた。	組織的な取組は適切に機能していると評価する。今後もデータの継続的分析と早期対応の仕組みを維持し、安心・安全な学習環境の確保に努めていただきたい	・これから増えるであろう多種多様な価値観や考え方を想定し対応を考えておく。チーム学校の力の底上げを図るため、よりスピーディーかつ丁寧に情報共有、理解を進める。
	②不登校支援の取組み	家庭訪問や電話連絡等による指導及び家庭との連携、課題等による学習保証	4	担任との連携を図り、学校チームとして対応できた。必要に応じてSSWやSC、医療機関とも連携し、生徒自身がより安全安心に学校生活が送れるように支援できた。特に配慮が必要な生徒へは、個別最適の観点で生徒、保護者へ学校としてできる限りの対応を実践できた。	家庭との連携を含む丁寧な支援体制は評価できる。ICTを活用した学習保証やオンライン支援の可能性も視野に入れ、多様な学習機会の確保を期待する。	・これまでの直接的連携を継続しつつ、教員の業務改善を図るためによりITCを活用した連携の形を考え、実践していく。
	③教職員の業務改善	業務の見直し、IT活用による業務の資質向上・負担軽減	3	様々な場面でITの活用を推し進めている。全体的に、少しずつではあるがITの活用のより業務が円滑に回っていると感じる。しかし、同時に今までなかった専門的な業務が増え、それを一部の人員で支えている。また新たなミスや問題も発生している。それらの未然に防ぐシステムの構築、徹底が課題である。	業務の見直しやICT活用の取組は重要である。今後は校内データの活用や業務プロセスの可視化を進め、教育の質向上につながる働き方改革を推進することを期待する。	・少しでも業務の軽減がはかれるものは積極的に試験的に行う。
	④「すぐ-る」の活用、ホームページにおける情報発信	ホームページによる学校活動の配信、「すぐーる」による学年通信や各種連絡・案内の配信	4	各授業や部活動等の様子を、ほぼ数日間隔でHPに投稿してきた。HPによる広報活動は、非常に充実していると感じる。また、学年通信や学校からの案内、アンケート報告等の配信には、積極的に「すぐーる」やTeamsを活用して行った。	保護者からの評価も高く、取組は適切である。今後は生徒主体の発信や学習成果の構造化を進めることで、教育の価値をより明確に社会へ伝える広報へと発展することを期待する。	・情報セキュリティの観点により制限がかかっているので、従来の枠組みでできるだけ多くの情報発信に努める。
	⑤学校生活のルールや決まり（校則など）について	校則の見直し、スマートフォンやSNS利用についての指導	4	例年、生徒会を中心に育友会の意見も交え校則の見直しに取り組んでいる。多くの学校が見直したからではなく、本校の生徒に本当に必要かどうかを自身に考えさせ、進めている。本年度は、	社会性や情報倫理の観点から適切な指導が行われていると評価する。特にSNSやデジタル機器利用については、規制だけでなく、主体的判断力を育てる教育的アプローチを今後も重視されたい。	・今まで通り、生徒らに考えさせ本校生に必要な校則を考えていく。